

〈愛〉の構築

— 魯迅『傷逝』の〈語り手を超えるもの〉 —

Construction of Love: Superior Narrator in LUXUN'S SHANGSHI

周 非

ZHOU Fei

はじめに

作品『傷逝』は〈愛〉の問題を通して世界観認識の問題を提起し、世界観認識の問題から〈愛〉を問い直すとするのである。『傷逝』の男女主人公二人の悲劇は、「主体」と「客体」の二項対立する世界観認識がもたらす悲劇だと考える。

「主体」と「客体」の相関関係にある「主体」と「客体」は同時に生起するのであり、「主体」は「主体」の捉える「客体」に感じ変わるものである。この主客相関における「主体」同士の「愛」も「主体」の捉える「客体」に即して生まれるのであり、原理的に一瞬の情熱にすぎないのであろう。この一瞬の情熱に永遠たる価値を認めるならば、文字通り、一瞬が永遠であることになる。しかし我々

の「生」が一つの持続体である以上、一瞬と永遠が等価となる「現実」を受け入れようとすると、自己の「生」を切断せざるを得なくなるのである。切断される「生」に価値を認めるのは「虚無」を認めることになる。それが故に、主客相関のメタレベルで〈愛〉を再構築する必要があると考えるのである。

本論では、魯迅の近代小説『傷逝』の作品分析を通して、主客相関のメタレベルでの〈愛〉はどうして再構築されるべきか、どのように再構築されるのかを論じてみたい。この作品で現れた〈愛〉に対する認識は、「主体」と「客体」の二項対立する世界観認識を否定する地平の表れだと考えるのである。

更に、この作品の構造と作品が表明する世界観認識の相関に注目したい。この作品は一人称の「語り手」の向こうを語りせる〈語り手を超えるもの〉がはっきりと表れているのであり、主客相関にと

らわれる「物語」を瓦解させ、主客相関の向こうを喚起させる〈近代小説〉の使命を物語っているのである。

※本論の『傷逝』の引用本文は竹内好訳の『魯迅文集2』（ちくま文庫一九九一年三月二十六日）による。

一、〈近代小説〉の〈語り〉の二重性

『傷逝』には生身の「語り手」を超えて語られた領域があると考えるが、管見の限り、『傷逝』の先行研究は、生身の「語り手」が語った領域しか読んでいないのである。先行研究に関する詳しい分析は、筆者の読みを論じた上で行うが、ここで先に、〈近代小説〉の語りの特性について問題提起したい。

近代の物語文学と〈近代小説〉の違いについて、日本近代文学研究者の田中実氏がこのように論じた。

一般に物語と小説とは分けられています。しかし、近代の物語文学と〈近代小説〉とは峻別されていません。物語、もつと広く、お話と言ってもよいのですが、物語及びお話はある出来事を伝えるために語られたものです。物語・お話とは何かが起こることを語る、語り始めのAの時空間からBの時空間へ移動している、その過程を伝え、〈語る〉のが物語であり、お話であるとはわたくしは考えています。これに対し、〈近代小説〉は、ここでは日本の〈近代小説〉のみを念頭に置くのですが、その〈語り〉を一旦相対化し、そのメタレベルに立つて、これを捉え直す、すなわち、語られたその出来事とはその主体に応じて

表れた現象、出来事ではないのですから、これを媒体にしてこれを認識の対象として突き放し、世界とは何かを示す、これが〈近代小説〉であり、語られたものをそのまま認めるのではないのです。語っている主体Ⅱ〈語り手〉を超えるまなざし(Ⅱパースペクティブ・遠近法を持った世界観)を必要とします。物語・お話を媒体としながら、「客観描写」のレベル、すなわち、了解不能の《他者》に関わる世界観認識を「読み手」に見せるもの、三島由紀夫なら、これを「世界解釈」と断言します。その際、〈語り手〉は視点人物のまなざしを通して、対象人物を捉えるのですが、対象人物は視点人物の知覚するまなざしの〈向こう〉で独自のまなざしを抱え、これを〈語り手〉はあるいは〈語り手〉を超えるものⅡ〈機能としての語り手〉はその双方を語る、ここに「客観描写」を抱える〈近代小説〉が成立するのです。(講演「〈近代小説〉とは何か、その〈読み方・読まれ方〉——「客観描写」と漱石『夢十夜』「第一夜」を例に——」二〇一六年十月十七日 中央大学駿河台記念館(但し引用文は氏が世界文学会本誌のために後日書き改めたもの)(傍線引用者、以下同様)

傍線部から分かるように、氏が言うような、近代の物語文学と〈近代小説〉の違いに対する認識は、主体と客体の二項対立を否定する世界観認識に基づくのである。

田中氏の論述によると、〈近代小説〉は、「語り手」と〈語り手〉を超えるものⅡの両方を内包するのである。「語り手」が語る領域だけでは、〈近代小説〉が内包する「物語」の領域ではないのだ。〈近代小説〉の読者は、「語り手」が語る「物語」の領域を通して、「語

り手」が到達できない領域を構造化する役割があると考ええる。

続いて、『傷逝』の「生身」の「語り手」による〈語り〉を分析し、その〈語り〉がどのように作品の中で相対化されたかを論じてみたい。

二、「私」の「真実」への固執

『傷逝——浪生の手記——』は一人称の「語り手」の「私」の一篇の手記である。この手記は、「私」と亡くなった元恋人の子君との思い出をめぐる事柄が語られている。手記の冒頭はこのようになっていいる。「もし私にできるものなら、自分の悔恨と悲哀を書いてみたい。子君のために、また自分のために」と。そして末尾ではこう書いている。

生きている以上、あくまで新しい生命の道へ踏み込まねばならぬが、その第一歩は——いっその悔恨と悲哀を書き綴ることだ。子君のために、また自分のために。

私もまた、歌をうたうような泣き声で子君を葬るほかない。忘却のために葬るほかない。忘却せねばならない。自分のためには、忘却をもって子君を葬ったことさえ二度と思ひ出してはならない。

新しい生命の道へ第一歩を踏み込まねばならない。真実を心の傷に深く秘めて、黙々と前進しよう。忘却と嘘をわが道案内にして……

(傍点引用者 以下同様)

この冒頭と末尾の文章から分かるように、「私」の認識では、「私」の「悔恨と悲哀」をもたらししたのは、「真実」を打ち明けたことによつてであり、「私」はこれから「新しい生命の道へ」と前進するために、「真実を心の傷に深く秘めて」、「忘却と嘘をわが道案内に」しようとするのである。では、「私」の「悔恨と悲哀」とは如何なることであり、「私」のいう「真実」とは何であるかをストーリーを追つて考えてみよう。

「私」は子君との交際を始めた当時では、役所で「公文書や書信を筆写する仕事」をしていたが、自由、民主の近代思想の影響を受けた近代的知識人である。その時、子君はしばしば会館に住んでいた「私」に会いに来、「私」と「家庭の専制について、旧習の打破について、男女の平等について」、西洋近代文学者達について話していた。しかし、「私」はその理由を直接言わなかったが、二人の恋愛は子君の家族に反対されていたのだ。当時の自由恋愛、自由結婚が許されない社会制度の中で、子君は毅然として家族と縁を切り、「私」の愛を受け入れ、「私」と同棲生活を始めた。その逆のために、「私」と子君が社会から冷たい視線が注がれた。会館から引越し、下宿を借りた二人の同棲生活は最初は幸せだったが、だんだんと日常瑣事が溢れる日々の生活の中で、愛の熱が下がって行き、やがて、「私」が当時の社会に許されない同棲生活の為に仕事を辞めさせられ、二人は生活の困窮に追い詰められるようになったのである。この厳しい現実の中で、「私」は子君に対する愛が消えていたという「真実」を感じ、自分と子君が新しい生活を始めるために、この「真実」を子君に告げたのだ。

その後、子君は実家に戻り、間もなく死んだのだが、死因は「私」にも分らない。子君の死の消息を聞いた後に、「私」は再び会館に戻り、子君に「真実」を打ち明けたことがもたらした「悔恨と悲哀」にうちのめされて、この手記を書き始めるのである。

「私」は手記の中で何度も「真実」という言葉を使い、「真実」の意義を語っている。「私」は子君に、自分が既に子君を愛していないと打ち明けられずにいた時に、「真実」を語る時にはむろん大きな勇気が必要である。その勇気がなく、虚偽の上にかりそめの生をむさぼる人間には、新しい生命の道は開拓できない。いや、開拓できないどころか、人間存在そのものが無だ」と語った。子君に打ち明けようと決心した時には、「さいわい朝で時間は十分、いまこそ私は真実を語れる。新しい道の開拓にはまたとないチャンスだ」と語った。「私」に「真実」を話された子君が後に実家に戻り、戻るときには、二人のわずかしかな生活資材の全部を「私」に残してくれた。そこで「私」は「なぜあと何日かの辛抱をしないで、あんなに性急に真実を語ってしまったのだろう」と子君がこれから向き合わなければならない冷酷な現実を思い起こし、自分の行為を後悔する。さらに、「私」は自分の後悔をこのように語った。

子君に真実を語るべきではなかった。私たちは愛しあつたのだから、いつまでも嘘をささげるべきだった。もし真実が尊いものなら、それは子君にとって重苦しい虚空であつてはならない。むろん嘘とて虚空にはちがいないが、少なくともこれほど重苦しくはないはずだ。

この語りから「私」は子君に「真実」を話したことが子君には残酷であることを反省していると見えるが、「私」は終始「真実」そのものの意味を疑わずにいるのである。子君の死を知った後でも、なお、「かの女は私の与えた真実——愛なき人にかこまれて死ぬ運命がきまった」と自分の「真実」を固執するのだ。では、「私」の所謂「真実」に至るまでの経緯を追い、その「真実」の内実を解剖してみよう。

三、「私」の「真実」の理由——「新しい生命の道」

前の引用文傍線部から分かるように、「私」が当初子君に「真実」を告げたのは、「新しい生命の道」の開拓のためであり、「新しい生命の道」は「私」が「真実」に固執する理由である。

だが、手記の末尾では、「私」は「新しい生命の道」への「第一歩」を踏み出すために、これから「真実」を心の傷に深く秘め」る決意をした。つまり、「真実」を打ち明けるのも、「真実」を秘めるのも、「新しい生命の道」のためなのだ。すると、「新しい生命の道」とは所謂「真実」と嘘の矛盾体になり、その時々が必要に応じて「真実」が必要だったり、嘘が必要だったりすることになるのだろう。「私」はこの矛盾には気づかない。

実は「私」が追求する「新しい生命の道」の矛盾から、「私」の「新思想」の空虚性が分かるのと考えるのである。

当初、「私」が子君に近代的新思想を教え、封建的旧思想の打破を主張していた。子君はこの新思想の影響を受け、「わたしはわたし自身のもの、あの人たち、だれも干渉する権利がありません」と

自分の意志を強く固めたのである。子君のこの力強い言葉を聞いて、「私」は、「そのことは私の魂をゆり動かし、それから何日も私の耳に鳴り続けていた。しかも、中国の女性は厭世家が云々するような救いがたいものではなく、近い将来、きつと輝かしい黎明を迎えるにちがいないとわかって、ことばにあらわせぬほど嬉しかった」というふうにな強く心を打たれ、中国の女性と中国の将来まで連想したのである。その後、「私」が子君に求愛し、子君は家族と縁を切るまでして「私」の求愛を受け入れ、「私」と同棲生活を始めた。だから、「私」と子君の同棲生活自体は、旧思想及び、旧思想に支配される世間への蔑視、社会制度への挑戦を意味するはずだった。

しかし、「私」が当時の社会に許されない男女関係のために仕事まで失い、「旧思想」の被害を直接受ける中、「私」は「旧思想の打破」のために行動を起こすことが一度もないのだ。

失業した後、「私」と子君の関係が段々冷えていき、「私」は家から逃れ、公立図書館で、自分と子君のことについて考えを巡らした。「ひとりごとつくねんと坐つて回想したとき、自分が過去半年あまり、ひたすら愛——盲目的な愛——のために、人生の根本議を一切おろそかにしたことに気づいた。何よりもまず生きることだ。人は生きてこそ、愛はそれに伴って生まれる」というふうには、「生きること」の優先権を強調した。続いて「私」はこのような想像をしていた。「閲覧室も閲覧人も徐々に消えて、いつか私の眼には、怒濤の中の漁夫、塹壕中の兵士、自動車上の貴顕、国際都市の相場師、深山密林の豪傑、講壇上の教授、暮夜の運動者、深夜の盗賊……そして子君は——そこにいない」と。このように、「私」は「生きること」を強調しながら、これらのたわいのない夢想をしているのである。

本来ならば、「新思想」のために弾圧を受けた近代知識人の「私」は、この厳しい社会現実に働きかけることに「生きること」の意味を見出そうとすべきであろう。しかし「私」はドラマチックな自己実現を望んでいるようであり、ドラマチックな自己実現こそ「私」に所謂「生きること」の意味であるようなのだ。このような「私」ととって、「旧思想の打破」などは空論に終始するしかないだろう。手記を書く「私」は終始自分の思想の空洞性を自覚しないのである。

「私」が子君に愛の終焉を告げてから、また公立図書館で夢想を始めた。

公立図書館にいと、よく眼前にさつと光がかすめて新しい生命の道が見えた。勇敢にもかの女は眼ぎめて、断乎としてこの氷のような家から出てゆく。しかも——怨む気色はさらにない。そこで私は空にただよう雲のように身が軽くなる。頭上には紺碧の空があり、脚下には深山大海が、大厦高樓が、戦場が、自動車が、国際都市が、公邸が、あかるい盛り場が、暗い夜が、……

しかもこの新生活はすぐにそこまで来ている予感が実際にする。

今度の「私」の「新生活」の夢想も前とは質的に変わっていないが、ただ子君が自ら家から出ていく場面を加えたものだ。実際子君が家から出て行ってから、「私」の頭にはまた似たような情景が浮んだ。「心が落ちつくにしたがつて重苦しい圧迫から脱出する道が

かすかに見えてくる——深山大海、国際都市、電灯の光まばゆい宴会場、塹壕、あやめもわかぬ闇夜、水の刃の一撃、音たてぬ忍び足……」と。子君の死を知ってから、「私はなおも新しいものの到来を期待していた。名づけようのない、予想される新しいものの到来を」というふうには「新しいもの」を希求し続けているのである。

「私」の生きた時代は、新旧思想が衝突し、近代主義の影響を受けた人々が封建主義の旧勢力と戦う時代である。この渦巻く時代の中で、「私」は新思想を信奉するエリートとして、何をしてきたのだろうか。「私」はもともと旧思想が支配する政府の役人だったが、旧思想に許されない男女関係のために仕事を失った。しかし、旧思想の被害者でもある「私」は相変わらず旧勢力と戦う側に立とうとするのではなく、むしろ時の官僚構造を支えている人たちに縋ろうとすることしか考えていないようだ。

だが、「私」は「長いこと無沙汰した昔の友人をまた訪問してみたが、一回か二回でやめてしまった。かれらの家はむろん暖かったが、私は骨にしみる寒さを感じた」というふうには権勢側の人たちから弾き出されてしまったのだ。それらの官僚たちにとって、公然と「背徳行為」をなす「私」とは、彼らの「倫理道徳」では許せない存在だけではなく、近代思想の毒を持つ、自分たちが維持しようとする社会制度を脅かす危険人物でもあるはずだ。「私」はこのようなジレンマに陥りながらも、なお自分の思想上の虚偽を反省しようとしなない。

嘗て子君は新思想をもつ「私」に惹かれ、「私」の「愛」を受け入れる勇氣を持つようになったが、「私」の新思想が虚偽である以上、子君との愛の基盤も虚偽だったと言えよう。それに、例え「新

思想」に対する強い信念があったとしても、「愛」を実体概念だとすると、「愛の消失」が運命づけられてしまうと考えられるのである。この点に関しては後で詳しく論じるが、「私」が客観的「真実」を信じて疑わないことと同じく、「愛」をも「客観的実在」だと考えるから、自分の「愛」の消失を「真実」だと格付けけるのだ。

四、「私」の「真実」の生成——「愛」の消失

「私」は自分が子君に告白した場面をとつくに忘れていた。

あのとき自分がどんなやり方で、純粹にして熱烈な愛をかの人に伝えたのか、もう今は思い出せない。今どころか、その直後にもうぼやけて、夜になって思い出そうとしても断片しか残っていないかった。その断片すら、同棲一、二か月後には跡形もなく消えてしまった。ただ覚えているのは、事前の十数日間、自分のとるべき態度をつぶさに研究し、発言の順序を立て、万一反拒されたときの措置まで考えたことだ。だがその場に臨んではどれも役に立たず、すつかりあがつて、我しらず映画で見たようにやってしまった。あとで思い出すたびに顔がほてるが、意地わるいことに、それだけがいつまでも記憶に残っている、今でも暗室の豆ランプのようにその光景を照らし出す——私が涙をうかべてかの女の手をとり、片膝をついて……

「私」は子君に自分の愛を受け入れてもらうために、話のテクニクをよく考えておいたが、その直後に、既に自分が子君に何を言っ

たかを忘れかけていた。つまり、「私」が子君に話したことはあくまでも目的達成するためのその場限りの話であつて、目的達成のために「我しらず」に映画の場面まで援用し、後に思い出すのも恥ずかしい行動を思わずと取つてしまつたのだ。このような形で、「私」は子君に対する「純粹にして熱烈な愛」を伝えたのである。

このように「愛」を伝えられた子君は「私」と正反対に、その時のことを細部まで頭に刻み込み、一番甘美な思い出として繰り返し復習していた。

私の言つたことを、まるで熟読したようにすらすら暗唱してみせた。私のやつたことを、まるで私には見えないフィルムが眼前にあるように、如実に事こまかに述べてみせた。むろん私が二度と思ひ出したくないあの浅薄な映画の一シーンをふくめて。夜がふけてあたりが静かになると、さし向いの復習の時間がくる。私はいつも質問され、試験され、おまけにあの時しゃべつたことの復誦を命ぜられるが、まるで劣等生のように、しょつちゅうかの女から補足され、訂正される始末だつた。

この復習も後にはだんだん回数があつた。だが私は、かの女が眼を虚空に向けてうっとり思いに沈み、顔色がますます和らぎ、えくぼが深くなるとき、ああ、また例の学課を自修しているな、とわかる。

ここから、子君は告白された当時のようなロマンチックな愛に憧れていたと分かる。だが、子君はこのロマンチックな夢を見つつも、実生活で背負うべきものを忘れていないのである。

「私」の子君に対する愛が段々冷めてきた経緯を辿っていくと、最初は生活上のやむを得ない瑣事のためだつた。子君は「私」と同棲生活を始めてから、家事に全力を注いだ。その時の生活について、「私」は「平安と幸福」としながら、子君が「家事にかまけて雑談の暇さえなく、読書や散歩どころではなかつた」と残念がっていた。「私」は子君の心労ぶりを見て、子君を「おれの食事なんかどうでもいいから、そんなに骨ばかりおるなど一度忠告してみたが、かの女は私の顔をぬすみ見ただけで口はきかなかつた。ただ寂しそうな表情をうかべたので、私も口をつぐんだ。しかしかの女は、相変わらず骨ばかり折つていた」と。子君は何故「私」に労われた時に「寂しそうな表情をうかべた」のだろうか。

子君は田舎出身で、「私」と付き合つていた時は叔父の家で寄宿生活していた。その時、子君は時々「私」が住んでいた会館を訪れ、二人は一緒に新思想の話、西洋新文学の話をしていった。子君は「私」の先進的な思想、広博の学識に惹かれ、「私」から強い影響を受けたのである。子君は「私」との生活には、周りの生活と違うものを期待していたのに違いない。だから、子君は「私が二度と思ひ出したくないあの浅薄な映画の一シーン」を繰り返し復習したのである。

ただ子君はロマンチックな生活に憧れがあるにも関わらず、「私」との生活のために、「雑談」、「散歩」、「読書」の暇も全部家事に使ひ切つたのだ。それは、子君の「愛」に対する責任感の表れだと考へる。だから、子君は「私」に「骨ばかりおるな」と「忠告」された時に、今の生活が自分の憧れていた生活との違いを思つて「寂しい表情をうかべた」が、自分の果たすべき責任のために「相変らず

骨ばかり折っていた」のであろう。

同棲生活の始まりの時に、「まこと愛は絶えず更新し、育成し、創造すべきものだ。私があることを子君に言おうと、かの女は深くうなずいた」との語りがあがるが、実際「愛」を「絶えず更新し、育成し、創造」するために自分なりの努力をしたのは子君の方だと見える。ただ、後で詳述するが、子君の「愛」の「更新」、「育成」、「創造」に関する理解も根本的に間違っていると考える。

「私」が仕事を辞めさせられてから、子君は一層家事に力を入れたようであるが、「私」は子君のやり方に不満があった。

さらに毎日の「川の流れの休みなぎ」食事ときている。子君の目標は全部この食事に集中しているらしかった。食っては金を工面し、金を工面しては食い、さらに阿随に食わせ、鶏に食わせる。かの女は前に知っていたことをすべて忘れたらしく、私の構想が食事の催促で中断されることに気がつかなかった。食卓で不機嫌な顔をみせても気がついて改めるどころか、平気でむしゃむしゃり出すのだ。

子君は「私」と付き合っていた当時からもともと仕事がなかったが、「私」と同棲してから専業主婦となった。「私」が仕事を失ったからも、子君は家事に専念していた。子君のこの生き方に対して、仕事を失った後の「私」は、他人に依存する生き方として心の中で批判したのである。

もうとうに本さえ読まず、生活の第一義は生きることであ

り、生きるためには手をたずさえて進むか、でなければ孤軍奮闘するしかないと忘れてしまったのだ。人の着物のすそにすぎるだけでは、戦士にとつても戦闘の足手まとい、これでは共に滅亡するほかない。

しかし、子君は他人に依存する女性ではないはずだ。それは「私」と同棲を決めた時の行動にも表れていた。

子君はたった一つの金の指輪とイヤリングを手放した。私はとめたが、どうしても売るといので、それ以上は強く言えなかった。いくらかは共同出資しなくては、かの女としても居心地がわるいのはわかっていた。

ここから考えると、子君が独立する精神を持っており、子君が社会で仕事を持たない理由は他人に依存したためではないはずだ。「私」もそれを知っていたが、当初の「私」は子君の努力を評価し、失業後の「私」は子君の努力を迷惑のように感じるようになったのだ。

当時は封建思想が支配する男性社会であり、知識人の「私」でも私生活のために仕事を辞めさせられるまでになつてしまった。この状況の中で、同じく同棲の罪を背負っている、女性の子君には生活手段を見つめるのは至難のことであろう。今の子君にとって、この家を支えるために自分に唯一できることは、家事を全部負担することであろう。これは子君の「私」に対する精一杯の支援なのだ。「私」はそれを理解しようとしな

「私」は食事の量が足りないことにも不満があり、自分より先に犬に食事をやり、自分の食べ残りを食べるのは鶏だけであることを、「ここにおける私の位置は犬と鶏の間にすぎないことを自覚した」と皮肉っぽく言うのだ。仕事を失い、しかも子君との恋愛関係のために仕事を失った「私」は、心の中の不満を子君にぶつけているようだ。仕事を辞めさせられたことは、「私」自身が意識した以上に、「私」に精神的ダメージを与えたと見える。

出勤停止令を受け取った時には、「私」はこのような反応だった。

こんなことは私には打撃でも何でもない。とつくに腹をきめてある。筆耕なり家庭教師なり、いつそ骨は折れるが翻訳でもやるんだ。それに『自由の友』の編集長は何度も顔を合わせた仲だし、ふた月ほど前には手紙もやり取りしている。とはいえ、思わず動悸した。あれほど恐れ知らぬ子君が顔色を変えたのが、ことに辛かった。ちかごろかの女はどうも気が弱くなった。《何でもないわよ。ねえ、新しい仕事をはじめましょう。わたしたち……》

ことばはそこで切れる。その声がなぜか私の耳にうわずつて聞こえた。ランプもいやに暗い。人間はおかしな動物だ。ほんの些細なことから深刻に影響されてしまう。

「私」は自分が辞職させられたことを「打撃でも何でもない」、外の仕事はいくらでもあると「とつくに腹をきめてある」と言うが、知らせをもらった時に「思わず動悸した」のだ。「思わず動悸した」というのは、やはり「私」が突如の変化の前で緊張、不安を感じた

に違ない。しかし、「私」は自分が緊張と不安を感じた理由をよく考えず、このことを「ほんの些細なこと」と決めつけた。「私」のこのような、物事を深く考えようとしない態度が、その後の挫折にも繋がったと考える。

その後、「私」の予想に反して、「私」はなかなか新しい生活手段が見つかからない。この事実からも分かるように、当時動揺していた子君は「気が弱くなった」のではなく、彼女は当時の厳しい社会状況を冷静に見ているからである。子君に比べて、「私」はただ盲目的な自信をもっているのにすぎないと言えよう。「私」の盲目的な自信はどこからくるのだろうか。「私」は今の仕事から離れる意味についてこのように語った。

外からの打撃はむしろ私たちに新しい元気を振り立たせた。役所の生活は小鳥屋の小鳥同然、わずかの粟で命をつなぐだけで、肥えることは絶対ない。日がたつにつれ羽がなえて、たとい籠から出ても思いきって飛べなくなる。いまともかく籠から抜け出たからには、さつそく私は新しい広大な空に向って舞いあがらねばならない。私の翼がはばたきを忘れぬうちに。

「私」がいう「新しい広大な空」とは先述したドラマチックな「新しい生命の道」への夢想でしかないだろう。この夢想こそ「私」の盲目的な自信をもたらしたもののなのだ。しかし先述したように、「新しい生命の道」とはそもそも「私」の内面の空洞の表れなのだ。

「私」は犬を飼う余裕もなくなったため、子君が飼っていた「阿随」を捨てたが、「阿随」を捨てた後の「子君の表情にびっくりした」

のである。

こんな打ちのめされた顔は一度も見ることがない。むろん原因は阿随だが、なにもそれほどまでという気がした。穴に突き落とした話はまだしてないのだ。

夜になるとかの女の打ちのめされた顔に、さらに氷のような冷たさが加わった。

「私」には子君の反応が意外だったが、子君の立場に立つて考えると、その反応が当然且つ必然だと考える。子君のその反応は阿随の為でもあるが、それだけではないのだ。

子君は飼っていた犬を「阿随」と名づけたが、中国語の「随」の意味は「従う、伴う」の意味である。子君がこのような名前を選んだのは、自分が「私」に一生「従う、伴う」という決心の表れではないだろうか。だが、「私」は「この名は好きになれなかった」のであり、子君の気持ちがかかっていないのだ。子君は阿随が「私」に捨てられたのを見て、自分もいつか同じ運命になるのではないかと予感したから、「打ちのめされた顔」、「氷のような」冷たい表情をしたのではないだろうか。

子君はこの予感があるからこそ、後の「私」の冷たい態度を感じた時に、子君の目から「恐怖の影」があったのだ。

ある晩のこと、めずらしく子君の眼からあどけない光が射して、自分から会館のころの話をもちかけたことがあったが、そのときでも恐怖の影が絶えずかすめた。自分がちかごろかの女

以上にそっけなく、そのためかの女が疑惑にとらわれているのを知っている私は、つとめてその話に乗り、いくらかでも相手をなぐさめたいと思った。だが私が笑いを顔にうかべ、ことばを口にする瞬間に、それはたちまち空虚と変わり、その空虚は堪えがたい悪意にみちた嘲笑となつてたちまちわが身にはね返った。

子君にとって、「私」の愛を失うのは、悲しいというより「恐怖」なのだ。それは、「私」と別れた後の自分の運命に対する「恐怖」に違いない。しかし、「私」は子君の「恐怖」が見えても無視するだけで、自分が「嘘」をいう時の「空虚」しか感じていなかったのだ。

「私」は子君の心情を理解しないだけでなく、自分の置かれている立場も理解しないのである。

どうやら私のことを薄情な人間ときめつけている様子だ。しかし私は、自分ひとりなら十分やっていける。もともと気位が高くて親戚縁者とききあわず、移転からこつち旧知ともすつかり疎遠になったが、ここからとび出しさえすれば生命の道はまだまだ広大だ。今の苦しい生活に堪えているのも、じつはかの女のためが大半で、阿随を捨てたのだからそのためだ。ところが子君ときたら、それすら気がつかぬほど鈍感になつたらしい。

機会をみてそれとなく論じてやると、得心したようにならずいた。だがその後の様子では、どうも理解したようでない、い

や、まるきり信用してないようだった。

子君と別れた後にも「私」は生活状況が換えられず、「気位」を低めて「親戚縁者」や「旧知」などを訪ねても「疎遠」されただけだった。この事実からも、「私」のその時の考え方が完全に間違っていたと分かるだろう。それよりも問題なのは、手記を書いている現在の「私」はまだ当時の自分の間違いに気がつかず、当時の自分を相対化できないことだ。

子君は「私」の論理を「まるきり信用してないよう」であつて、自分たちの状況を冷静に見ているが、「私」は自分の論理を固めるいっぽうだ。

ひとりつくねんと坐つて回想したとき、自分が過去半年あまり、ひたすら愛——盲目的な愛——のために人生の根本議を一切おろそかにしたことに気づいた。何よりもまず生きることだ。人は生きてこそ、愛はそれに伴つて生まれる。この世に奮闘する者のために活路が開かれぬはずはなく、私は翼のはばたきを忘れてはいない。以前にくらべてかなり衰えはしたけれども……

ここまで分析してきたように、子君の方は、「私」と一緒になつてから、真面目に「生きることを考え、そのために努力もしてきた。『盲目的な愛』という言葉の子君に使うならば、「私」の内面の空洞と矛盾を見抜かないこと、『愛』を固定した客観的事実として捉えていたことを表す意味で使えるかもしれないが、「私」の言う

ように「愛」のために「生きることを「おろそかにした」意味での『盲目的な愛』ではなかったのだ。「私」には子君の努力と苦勞が見えず、自分が夢想する虚偽でしかない「新しい生命の道」を念頭において、子君との愛を「生きることを「おろそかにした」『盲目的な愛』と言うが、実は「私』のいう「生きることを「こそ盲目的だったのであるう。

「盲目」な「私」はついに子君と別れることを決意した。

残された希望は別れることだけだ、と私は考えた。かの女はいさぎよく出て行くべきだ——不意にかの女の死を念頭にうかべ、すぐに後悔し自分を責めた。さいわい朝で時間は十分、いまこそ私は真実を語れる。新しい道の開拓にはまたとないチャンスだ。

「私」が「新しい道の開拓」のために子君に告げた「真実」とは、「ぼくはもうきみを愛していないんだ」ということだ。しかし既に分析したように、もう愛していないという「私」の「真実」に至るまでに、どれほどの「虚偽」を「私」が見過ごしてきたのだろうか。

「私」は「真実」を勝手に決めることが出来るからこそ、もう「愛していない」子君が離れた後にこのような勝手な想像もできてしまふのだ。

私は吉兆胡同を離れたかった。ここには異様な空虚と寂寞がある。ここを離れさえすれば、子君は私の側にいるも同然だと

私は思う。少くとも、もし市中にまだいるなら、いつの日か、
会館のころのように不意に私を訪ねて来るだろう。

「私」は自分から離れた子君の今後の運命を予想していないのではない。「だが、私はまた心が重くなった」、「いまかの女は、(中略)空虚の重荷をかついで、厳しさと冷い眼のただ中を、いわゆる人生の道に踏み込むとは、なんとおそろしいことか」と「私」は一方で子君のこれからの悲惨な人生を予測し、一方で何も起こっていないかの如き想像で自分の重い心を軽くしようとするのだ。

「私」のこのような無責任な考え方は、子君の死によっても変えられなかった。「私」は子君を「忘却の中に葬るほかない」、「忘却をもって子君を葬ったことさえ二度と思いついてはならない」と語ったように、子君の存在そのものを忘れようとするのだ。つまり「私」は子君の死乃至子君の生が、自分の生命に何の痕跡も残してほしくないのだ。

では、何故過去を「忘却」したい。「私」は逆に自分の「悔恨と悲哀」を書き綴りたいのだろうか。

五、「私」の「真実」の亀裂——「悔恨と悲哀」

手記の冒頭と末尾で書いているように、「私」は自分の「悔恨と悲哀」をこの手記に書きたいのである。だが、「私」が「真実」に向おうとしないからこそ、最後の「悔恨と悲哀」の結果になってしまった。それなのに、「私」は逆に「真実」のためにこの結果になったと悔み、「忘却と嘘をわが道案内に」しようとするのだ。すると、

「私」の「悔恨と悲哀」は何を意味し、「悔恨と悲哀を書き綴る」とは「私」によって何の意味があるだろうか。

いや、実は、「私」の「悔恨と悲哀」から、「私」が自分の「真実」の虚偽性を見過ごしたことが分かるだけでなく、「私」が意識的にある「虚偽」を隠そうとする意図も見えるのである。

子君の死の後に、「私」は自分の「悔恨と悲哀」を子君に告げたくて叶えられないのを苦しんでいる。

本当に幽魂や地獄があつてくれたらと思う。そうすれば私は、地獄の風がどんなに怒り狂おうと、きつと子君をさがし出して、面と向かつて自分の悔恨と悲哀を告白し、許しを乞うだろう。

その風と焰の中で子君をかき抱いて寛容を乞えば、いくらかでも心なぐさんでくれるのでは……

では、「私」は子君にどのような「悔恨と悲哀」を告げたいのだろうか。子君が「私」と別れて父親に連れて帰られた直後に、「私」はまた自分の「新しい生命の道」を想像したが、同時に後悔の念が沸き上がった。

だが私はまた心が重くなった。なぜあと何日かの辛抱をしな
いで、あんなに性急に真実を語ってしまったのだろう。いまかの女は、自分に残されたものが、父親——子女の債権者——の烈日の厳しさと、世人の水にまざる冷たい眼だけのことを知っていたのだ。あとは空虚だ。空虚の重荷をかついで、厳しさと冷い

眼のただ中を、いわゆる人生の道に踏み込むとは、なんとおそろしいことか！しかもこの道の尽きるところ、わずかに——墓標さえない墓なのだ。

(中略)

「真実」を子君に語れば、かの女はためらうことなく、同棲を介意したとき同様に断乎として前進するだろうと私は考えた。だがこれは私の誤りだったらしい。あのとき勇敢で畏れを知らなかったのは、愛にもとづくものだったのだ。

「私」が後悔したのは子君に「真実」を話したことであり、話したことが「真実」であるのを疑わずにいる。つまり、「私」は今までのできごとを全く反省せずに、自分のことも子君のことも分らないままにいるのだ。だったら、例えば子君の「幽魂」が「私」の「悔恨と悲哀」を聞いたとしても、何の意味があるのだろうか。

それよりも「私」は本当に「真実」を話したことを後悔したのだろうか。傍線部で書いたように、「私」は「なぜあと何日かの辛抱」をしなかったことを後悔している。しかし「あと何日かの辛抱」で何が変わるのだろうか。「私」がいずれ子君に「真実」を話すつもりだったら、話すタイミングによって子君の運命が変わるはずがないのに決まっている。

それに、「私」は子君に「真実」を話した時に、本当に子君がこれから「断固として前進するだろう」と考えたとは信じられない。この問題は、当時の中国の時代状況と合わせて考える必要がある。当時の中国は、近代思想が芽生えたばかりの封建時代であり、社会を支配する封建勢力は近代思想を異端として強力に鎮圧してい

るのである。特に女性にとって、一旦「背徳者」のラベルを貼られてしまうと、もう社会での生き場をなくしてしまうのだ。この厳しい社会状況の中で、どうして「私」は、自分自身もまだ進むべき道がなかなか見つからないのに、同じく世間に「背徳者」のラベルを貼られた独りぼっちな女性の子君に「前進する」道があると思えるのだろうか。

いや、「私」は最初から、子君に「前進する」道がないと承知しながらも、自分の「新しい生命の道」のために子君を犠牲にすることを意識的に選んだのだ。だから「私」は子君の死を知った後でも、「なおも新しいものの到来を期待していた」のだろうか。

「私」は、「真実」を聞いた子君の眼を、「子どもが空腹のとき慈母を求めるように周囲に注がれたが、私の眼をおそれてか虚空にとどまった」と描写した。その時の子君の眼がこのように「私」に見えたということは、「私」が子君に「真実」を告げる時に既に、母親を失った空腹の子どものような惨めな運命が子君を待っていることを予想したからだ。決して、「私」が言うように子君が「断固として前進するだろう」と本当に考えたのではない。「私」は子君に対しては「空腹の子ども」を捨てた母親のような良心の咎めがあるのである。

しかし「私」の「悔恨」を語るこの部分から見ると、あたかも、「私」が子君の今後のみじめな人生を意識した時にもう手遅れであるかのように感じられるが、それは「私」が子君を意識的に犠牲にしたことを認めたくない、良心の咎めを隠そうとする隠蔽行為として考えられないのである。

この事実は、戻ってきた阿随に対する「私」の反応からも分かる

のである。子君の死後、「私」に穴に突き落とされて捨てられた犬の阿随は奇跡的に戻ってきた。

つくづく眺めたとき、私は心臓が一瞬とまり、つづいて大きく波うった。

阿随だった。帰ってきたのだ。

私が吉兆胡同を離れたのは、家主一家とその女中の冷い眼ばかりでなく、大半はこの阿随のせいである。

「私」は二度阿随を捨てたのである。ただ今回は阿随を家から追い払うのではなく、「私」が引越したのだ。子君は以前、自分たちさえ食事が足りない時でも、阿随を飢えさせたくないほど阿随を可愛がっていた。もしも、「私」が本当に自分の語った通りに、「真実」を話した時に子君の悲惨の運命を予測できなくて、子君に不意の罪を犯してしまったことを後悔しているならば、阿随が戻ってきたのは、「私」にとつて思いがけない贖罪するチャンスであるはずであろう。子君の代わりに阿随を育ててあげることは、子君に対するせめての償いになるはずだ。しかし「私」は阿随から逃げてしまった。瀕死の阿随を見捨て、子君に対する新たな罪を重なるまで、「私」が阿随から逃げないとならない理由があるのだ。

それは「私」が阿随を恐れているからだ。「私」はかつて生活の困窮のため、阿随を穴に突き落とし、阿随を見殺しにするようなことをした。今阿随は生きて戻ったが、阿随と同じく「私」に「見殺し」されたような子君はもう二度と戻ってこない。だから阿随は

「私」にとつて、自分が子君に犯した罪を見せつける、良心を鞭打つ存在であろう。良心の咎めを隠蔽しようとする「私」は阿随から逃げるしかないのだ。

「私」は隠蔽作業が施された「悔恨と悲哀」を書くことで、自分が子君に犯した罪を確信犯から過失罪にすり替え、過去を「忘却」するために欠かせない準備をしたのである。

「私」の「悔恨と悲哀」を書いた手記には、「私」が無自覚である「虚偽」に満ちる「真実」だけではなく、「私」が自覚する真実の「虚偽」も隠されているのだ。

六、「真実」の共同制作——子君の「沈黙」

「私」と子君の関係がそのような不幸な結果になったのは、「私」の自己相対化の欠如のためだけではなく、子君の主体の働きの弱さのためでもあるのだ。子君は二人の関係において、ほとんど沈黙する存在である。

同棲生活が始まったばかりのころ、子君は近所とのいざこざを「私」に黙っていた。

私まで不愉快にさせたのは、夕方帰宅してみると、かの女がよく自分の不愉快を隠そうとすることにおもしろくないのは、強いて笑顔を見せようとすることだった。問いつめてみれば、何のことはない、役人の細君とのいざこざが原因で、その火種は両家の鶏だという。それにしてもなぜ私に打ちあけて

くれないのか。

無論、子君は「私」を不愉快にさせないために「私」から嫌な生活瑣事を隠したのだが、隠したことが逆に「私」を不愉快にさせた。傍線部で書いたように、「私」は子君と何事も包み隠さず共有することを望んでいたようだ。しかし子君は沈黙し続けるだけだった。子君は「私」から、家事のために「骨ばかり折るな」と忠告された時も、「ただ寂しそうな表情を浮かべた」だけだった。先述したように、子君が「寂しそうな表情を浮かべた」のには理由があるが、子君は自分の心情を「私」に言わないために、二人の溝がどんどん深まっていくのだった。

阿随が「私」に捨てられた夜、「私」は子君の「打ちのめされた顔に、さらに氷のような冷たさが加わった」と気づき、子君に声をかけた。

《へんだね——子君、どうしたのさ、きょうは？》こらえかねて私はそう声をかけた。

《なにが？》私のほうを見ようとしめない。

《きみの顔色……》

《なんでもない——なんでもないのよ》

ここでも、子君はやはり前述した、自分の運命に対する不安を「私」に打ちあげようとなし。一方で「私」の目には、子君はただ、今の大変な生活状況を理解しない、犬のために悲しむ見識のない女として映っただけだ。

子君がもつとも恐れていること、「私」の感情の変化に気がついた後にも、「私」と打ち解けようとしないのである。

子君も気づいたらしく、それからは無感覚とも見えるそれまでの冷静さをなくして、隠そうとして隠しきれぬ疑惑の色をしば顔にあらわした。もつとも私に対しては、ずっとおだやかにになった。

(中略)

このときからかの女はまだ昔の復習と新しい試験をやりはじめた。やむをえず私は虚偽のいたわりの答案をたくさん作り、いたわりをかの女に示し、虚偽の草稿は自分の心に書き付けた。この草稿で自分の心が埋まってゆくため、絶えず呼吸困難になった。苦悩の中で私はいつも考える。真実を語るにはむろん大きな勇気が必要である。その勇気がなく、虚偽の上にかりそめの生をむさぼる人間には、新しい生命の道は開拓できない。いや、開拓できないどころか、人間存在そのものが無だ。

子君は「私」に今の心情を話してもらおう代わりに、過去の甘い話ばかりを繰り返させていた。既に過去の気持ちと大きくかけ離れた現在の心情を「真実」とする「私」にとつて、無理に過去を押し付けられるのは、ただ今の「真実」が一層刺激されるだけだろう。結局、二人の関係に変化が起こってから、二人の間に真の交流が交わされることもなく、最後に「私」から子君に「もう君を愛していない」という「真実」が告げられるだけだった。しかも、子君はこの「真実」を告げられても、相変わらず「沈黙だけだった」のであり、

「私」に原因も聞こうとしない。

せめて、「もう君を愛していない」と言われた時に、もし子君が沈黙を破って、「私」との交流を求めれば、「私」の「真実」が相対化されるかもしれないだろう。そうすれば、自分の「真実」で自己欺瞞する「私」が目覚めるだけでなく、「私」の「真実」に巻き込まれた子君も救われたのではないだろうか。

七、「真実」の結果——子君の死

「私」と別れた子君には、「私」がいうような「前進する」道はないだろうが、生きる希望が持てたはずだと考えるのである。

「私」の手記では子君の死因について「私」も知らないという設定になっているが、「私」の手記の書き方から見ると、「私」は子君の死が自死だとはつきり分かっているはずである。子君は「私」と同棲してから、「ふとりはじめ、血色もよくなつた」。二人の生活が困窮に陥ってから、「私」の目に子君がこのように映った。「阿随のために泣き、飯ごしらえに夢中になることでの女はすっかり勇気を失った。その割に痩せもしないのが不思議だが……」と。これらの描写から、子君は旺盛な生命力を持っていると分かる。しかし生命力旺盛な子君は「私」と別れて間もなく死んでしまったのだ。子君の死後、前述したように、「私」は自分の虚偽の「悔恨と悲哀」を書き綴り、子君の死に対する自分の責任を認める形で逆に本当の罪から逃れようとするのだ。「私」は子君が自死したと推定したからこそ、自分に直接責任があると意識し、本当の罪から逃げずにはいられなかったに違いない。

但し、「私」と別れた子君は自死するしかなかったのだろうか。

まずは田舎の実家に戻った後の子君の状況を考えてみよう。当時比較的オーブンな都会でも同棲が背德的行為と見られるので、田舎では同棲経験のある子君がどんなに軽蔑され、冷遇されるかは想像し難くない。子君だけではなく、子君の家族も巻添えにされ、当初「私」と子君の関係を反対していた家族の怒りもまた子君にぶつけられてしまう可能性があるだろう。このような状況を生き抜くのは確かに大変なことである。しかし一方、子君はそれらの「旧思想」の支配下の蔑視、冷遇に対抗する「新思想」の影響を受けたのである。

子君は「私」と付き合っていた頃、他人の目に対して「わき目もふらずに、一顧だにせず堂々と」していたのだ。「私」と同棲し始めてからも「堂々」とする態度が変わらなかった。

このころはじめて肩を並べて道を歩いた。公園にも何回か行ったが、それより住宅さが多かった。ならんで道を歩くと、いつも好奇心や下司笑いや好色や軽蔑の眼が向けられるのを感じる。うっかりすると全身がすくみそうになり、その度に私は傲然とし、反抗心を奮いたたせて、辛くも自分を支えた。しかしかの女のほうは、なに憚ることなく、まったくの無関心で、ゆっくり歩を運び、さながら無人の境を行くように平然と歩いていた。

同じく蔑視されながら、当時の子君が全く平気であり、今の子君が自殺せざるを得ないのは何故だろうか。それは「私」が言ったよ

うに、単に「あの時勇敢で畏れを知らなかったのは、愛にもとづくものだったのだ」ということではないだろう。もし子君が「新思想」が提唱する「自由恋愛」を依然として信奉しているならば、「私」の「愛」を失っても、自由な精神に基づく「愛」の希望は失われなはずである。しかし、子君は完全に絶望し、自殺の道を選んだのだ。

つまり、以前「新思想」を信奉して疑わない子君は自らの経験から、「新思想」が主張する「自由恋愛」が悲劇的な結果になるだけだと「悟った」のであろう。子君は封建的な教育を受けてきたが、「私」の影響で「恋愛」の意味を知ったのだろう。だから、子君にとつて、「私」に別れを告げられたことは、「恋愛」そのものが信用できない意味になるのだ。

無論、子君の認識には問題があるが、その問題の所在を突き詰めてみよう。子君の認識の問題の所在が分かって初めて、子君の魂が救われる可能性が生まれるのだ。結論を先に言うと、「新思想」が提唱する「自由恋愛」自体が悲劇的な結果をもたらすのではなく、「恋愛」そのものを実体化することが、「恋愛」の生命力を奪う原因だと考えるのである。

子君を啓蒙した「私」は自分の認識を掘り下げず、「愛」の意味を深く考えないが、子君の場合は瞬間的な情熱の永遠の持続こそ「愛」だと思っているようだ。だから「私」の告白場面を何度も復習し、「私」の「愛」を挽回するためにも、その時の「私」の話を援用しようとしたのだ。

子君が思うような、瞬間的情熱が固定されて「愛」になることのメカニズムを考えてみよう。「主体」と「客体」が同時に生起する

ために、瞬間的情熱が固定されることは、「主体」と「客体」が同時に硬直してしまうことになるだろう。硬直された「主体」は如何に情熱を持続させるのだろうか。子君の「愛」に対する認識は、「主体」と「客体」の二項対立する世界観認識に基づくのであり、「主体」も「客体」も実体だとするために、「主体」の情熱も実体のごとく持続できるものと思うのであろう。

主客相関の相対性から考えると、「愛」を固定しようとするれば必然的に「主体」の硬直に繋がり、逆に「愛」を失うのである。固定された「愛」を失った子君にとつて、「愛」が再構築される可能性が存在せず、「愛」の希望を永遠に失うことになるのだ。だから、「愛」の実体概念こそ、子君が自死した根本的原因だと考えるのである。子君の魂を救うには、〈愛〉の概念を考え直すことから始まらないとならない。

八、「真実の百面相」と〈愛〉の構築

多くの先行研究は、「私」と子君の悲劇は当時の社会がもたらしたものとするが、今まで分析してきたように、二人は社会に対抗して愛し合う可能性を持っていたのにも関わらず、「私」の自己相対化の欠如と子君の主体的働きの欠如のために、悲劇的な結末を生みだしてしまっただけである。

「私」は主体が捉える「真実」を「真実そのもの」だとし、終始一貫して「真実」に拘っているが、子君も「私」の「真実」に加担し、「真実」の悲劇から逃れられなかった。「私」の「手記」は逆に、「真実」が主体の変化に応じて変わっていく、「百面相」を持つこと

を証明したのである。

哲学者の大森荘蔵は「真実の百面相」で、「真実」は唯一の決まった「面相」を持つものではなく、多種多様な「百面相」を持つているのであると論じた。「真実の百面相」の中でわれわれの命の安全と生活の安穩の目印になる面相を「正しい」とし、われわれを誤道しやすいた面相を「誤り」とする、こうした生活上の分類なのである。だからこの分類は世界観上の真偽の分類ではなく、極めて動物的でありまた極めて文化的でもある分類なのである。それを取り間違えて真実と虚妄の分類だとするとき、客観的世界とその主観的世界像の剥離の幻影に陥ってしまう」と。

「主体」と「客体」は「捉え・捉えられ」の瞬間に同時に生起し、「客体」と「主体」は相互に應じて変わっていく。だから、私達が捉えた外界の「真実」は自己化した「真実」でしかなく、「真実そのもの」ではないのだ。

主客相関に應じてつねに変わる「主体」を超えるために、主客相関のメカニズムを捉え直し、「客体」を捉える「主体」を捉え直すことによって、「主体」⇔「客体」のメタレベルで、〈主体〉を再構築する必要があるのである。田中実氏が言ったように、「主体と客体の相関における主体ではなく、そのメタレベルでの〈主体〉は構築されるべきものであります」。(続〈主体〉の構築——魯迅の「故郷」再々論——「国語教育思想研究」 広島大学教養学部難波博孝研究室 二〇一四年五月)

〈主体〉が構築される概念である以上、〈主体〉同士に呼応する〈愛〉も構築される概念になるのであろう。だから、主客相関のメカニズムを捉え直そうとする〈主体〉同士の〈愛〉は常に構築され

つつある動的過程である。構築される〈愛〉こそ、一瞬の情熱を「永遠」に化す原動力を持つと考えるのだ。

〈愛〉の構築が基づく世界観認識は「傷逝」の生身の「語り手」を超えて語られたのであり、このような作品構造は、主客相関を捉え直そうとする世界観認識と通底しているのである。更に、この世界観認識を通して、本作品は、「社会思想」そのものの相対性も示唆していると考える。「新思想」を含むあらゆる「社会思想」も「愛」の概念と同じく、常に内側から壊されつつ構築されていく必要があるだろう。そうして始めて、思想上の虚偽と向き合うことになり、「私」のようにいつまでも自分の思想の矛盾に気づかないでいる事態を免れるのであろう。

九、〈語り手〉の領域と〈語り手を超えるもの〉の領域

——終わりにかえて

作品『傷逝』は「私」の手記でありながら、「語り手」⇔手記の書き手の「私」の「真実」を相対化し、「私」の世界観認識を相対化したのである。この生身の「語り手」を超えて語られた領域は〈語り手を超えるもの〉が語る領域であり、「語り手」が語る「物語」の領域を内包させる〈近代小説〉の領域なのだ。

〈近代小説〉を読むには、この〈語り手を超えるもの〉を読む必要があるが、「物語論」では「語り手」の領域しか読まず、限界があるのである。『傷逝』の先行研究からその例を見てみよう。

先行研究「魯迅の小説『傷逝』について——物語論からの一考察——」(景慧「中国」二〇〇五年六月)は『傷逝』の「語り」について、

このように論じた。

以上見てきたように、作中人物の「私」の視線、内的思惟、独白などに語り手の「私」の「今」「ここ」が常に混入していることは明らかである。これは、語り手と主人公が同一人物である等質物語世界内という語り手の類型に規定されている結果ともいえる。故に「傷逝」に対して、物語行為と物語内容を分離する形で、それぞれのレベルに限定して考えようとすること自体は、上に検討した「傷逝」のテクストの現実を背くこととなる。従って、「傷逝」の物語論とは、「物語内容」をも内包する語り全体への考察ではなからうか。

この論述を見ると、景氏は過去が現在と独立して客観的に存在すると考えているようである。景氏の言う「物語内容」をも内包する語り全体への考察」とは、過去の「私」の視点と現在の「私」の視点の両方の考察である。

しかし、先述したように、主客二項対立する世界観認識は誤謬であり、「私」の過去とはそもそも現在の「私」によって語られた「過去」にすぎず、「私」の現在の視点から分離できないのだ。それに、所謂過去の「私」と現在の「私」の視点を「考察」しても、結局「私」の視点に限定された物事しか読み取れないのである。このことは、氏の結論からも証明できる。

このような消生の在り方、その「物語行為」を、エゴイズムと捉えるよりは、自己説得への終始、より正確にはナルシズム

ムとしての語りとして捉えるべきであり、それが物語として見た「傷逝」の語りの質であるとするのが、妥当なのではないだろうか。第十六節では消生の子君への「悔恨」が語られているが、「真実」と「虚偽」「虚言」の弁証法という体裁で示されているその「悔恨」にしても、過去に対して、別の角度から凝視することが出来ず、ひたすら「真実」「虚偽」「虚言」という語、また、それらの語による観念相互の整理——「真実」と「虚偽」というに二項対立への弁証的な思弁——を、語る時間にかけて織り出している消生の姿勢があるのである。このことは、「傷逝」、つまり消生の「手記」によって、「愛」「新生の道」「真実」「虚偽」、その言葉、その観念を語ること自体が、最初でしかも最終の自己目的になっているのではなからうか。

氏の言う「愛」「新生の道」「真実」「虚偽」の「観念」は、あくまでも語られた表層ストーリーから抽出したキーワードに過ぎないのだ。これらのキーワードからなるストーリーの深層に眠っている、「私」の認識の空白、及びその空白を暴露させることによつて現れた新たな認識こそ作品の言わんとすることなのだ。それは〈語り手を超えるもの〉が語った、「真実の百面相」と通底する世界観認識だと考えるのである。

それに、「語り手」の認識の空白を読み取ることは、語られた物語内容の空白を読むのではなく、語られた物語内容から表れた語る主体の認識の空白を読む意味なのだ。藤井省三氏の先行研究は、この問題を混淆したようである。

以上のように、魯迅小説「愛と死」は、主に次の五つの空白を抱え込みながら巧みに構成されている。第一に消生と子君の履歴および友人関係、第二に子君の不妊、第三に、両人の家族関係、第四にプロポーズの原型となったアメリカ・サイレント喜劇映画、第五に舞台としての都市空間。

(中略)

こうして「愛と死」の五つの空白を埋めた時、そこに浮かび上がるのは消生による裏切りの罪と共に、子君の「厭世家が言う」軽薄さである。「魯迅恋愛小説における空白の意匠——「愛と死

(原題・傷逝)」と森鷗外「舞姫」との比較研究——」藤井省三「東方学」一〇三年一月三十一日

続いて、藤井氏は、「かつては父や叔父に従い、同棲後は再び父に従わざるを得なかった子君の生き方」を批判し、「愛と死」における空白とは、死者一名を出すに至る同棲事件が、主犯消生と従犯子君との共犯による引き起こされたことを、犠牲者でもある子君を限りなく愛惜しつつ語るための意匠ではなかったらうか。」と論じたのである。

藤井氏は物語内容の空白を「埋める」ことで、悲劇的な同棲事件における子君の共犯性を言おうとしている。つまり、氏にとつて、語られた物語内容を相対化することは、語られた物語内容を補うことにすぎず、語る主体を相対化し、語る主体の認識を補うことには至らないのである。だから、氏は必然的に語られた物語内容内の虚偽を読み過ごしてしまうのだ。

景氏も藤井氏も、語ることの虚偽を認めず、語られたことをその

まま受け取る立場である。両氏の世界観認識は主客二項対立する認識であり、語る主体と語られた客体の相関関係を捉え直そうとしないのである。このような世界観認識こそ、作品『傷逝』が批判する世界観認識なのだ。

『傷逝』の中で、「語り手を超えるもの」が生身の「語り手」を相対化し、「語り」の虚偽を暴きつつ、「真実」が「百面相」である世界観認識を語ったのである。この世界観認識は語られた「物語」を自ら相対化させる〈近代小説〉の構造が体現する認識と通底するのである。『傷逝』の語り方からも、語られた物語内容からも、「物語」を瓦解させる〈近代小説〉の使命が物語られているのだ。

受領日 二〇一七年四月二六日

受理日 二〇一七年六月 七日